

本調査に関連する新聞記事

西日本新聞(朝刊)	1面	平成21年3月18日(火)	1
西日本新聞(朝刊)	34面	平成21年3月18日(火)	2
西日本新聞(朝刊)	34面	平成21年3月18日(火)	3

ミツバチの明日

の描き方

▷上

アルコールは一滴も入(ま)は多くの住民が集まっていたけれど、みんな笑いきさめいていた。風被害の前のようになに宮崎県西部、山に囲まれた西米良村八重集落。二月二十七日夜、集会所で国土交通省九州地方整備局が主催するワークシヨップ(研究会)が開かれた。「集落の未来をどう描くか」。福岡から来た職員やコンサルティンク会社の社員はそんなテーマを示し、住民に討議を呼び掛けた。

ワークシヨップという耳慣れない言葉に戸惑いつつ、集落に住む浜砂守

自然 ミツバチが来る日に

が増えた。みんなて集まる機会がめっきり減り、十年続いた集落主催の釣り大会が遠絶えた。

浜砂は集会所を見回し、五年分の寂しさを吐き出すように、話し合いは夜遅くまで続いた。

大半がまともな値段で出荷できない。真つすくに育たず、うろ(空洞)が生じる可能性が高い。ただでさえ材価は長期低迷している。長男の大学進学を記念して植えた木が被害に遭ったとき、言葉も出なかった。

シカやイノシシが山林を荒らすようになったの肌をさらしていた。八重は二十数年のことだ。気象や環境の変化が原因というが、尾前は人口減た。「住民みんなが猟師も一因と思う。人がいなくなろう」「シカ捕獲奨励金をもっと上げてもらい、木肌が赤い血を流しているような幻覚に



「山林が泣いている」。尾前幸男さんは、獣に傷つけられた樹木を見ながら露骨に顔を曇らせた

か、期待できない。それがどうかうれしかった。現実だ。尾前は一人で防衛ネットを張り続け、山林の広さを思うと、気が遠くなるけれど、尾前はワークシヨップで訴えた。「農家は大変だ」と答えた。会場に笑

が咲いている。ミツバチはまだ来ていないが、姿を見たならみんなに報告しようと思っっている。春の空を見上げる回数が増え、最近増えてきた。

ふるさとに活気を取り戻そうと、九州各地で住民たちの試行錯誤は続く。みんな「今できることを手探りするが、手法はさまざま。シリーズ第十三部では外部との交流を刺激に、次の一歩を踏み出すとする姿を追った。関係者へのインタビューと合わせ、ミツバチの明日をどう描くのか、現場で考えた。(敬称略)

わたしたちの九州 第13部

【34面に関連記事】

宮崎県西米良村八重集落のワークシヨップは、国土交通省九州地方整備局(九地整)が設置した「九州圏における地域の存続・再生に関する調査検討委員会」が実施した。同委員会メンバーで宮崎大工学部の吉武哲信准教授(地域都市計画)は、ワークシヨップの意義について聞いた。

(一面「連載」)

ワークシヨップは、三月に計三回開かれた。住民たちは「高齢化率54%」「後継者不足」で将来は教育しか残らない可能性もある集落の将来像を協議した。

ムラの明日の描き方

インタビュー編

八重集落のワークシヨップ

八重集落の人たちは、ワも参考になるものであろう。ワークシヨップをきっかけに、未来図を自ら考え、前向きに描いたのではないかと、夜桜祭り「なご回決まった取り組みは、山間地で厳しい状況にある各地の集落で



宮崎大工学部准教授

吉武 哲信さん

「住民は集落全体で楽しめる『夜桜祭り』の開催のシマタ栽培を中心とした花いっぱい運動に栽培を準備している人が、心といた花いっぱい運動に栽培を準備している人が、③狩猟免許取得などで昔、個人の思いが村に共とが大切だろう。

有る、それが集落のシンボルとなる動きは大きな財産になる。それぞれの集落には固有の歴史や文化、産業がある。それを踏まえて、どのような方法でどのような再生の道を採るのか考えなくてはならない。

出発点 見えたところ

「九地整が集落に入り、といった長い取り組みが必要。今回はもう少し具体的なシヨップを開くのは初め。道路や港湾、都市の整備を柱としてきた九地整の新たな取り組みとして注目された。九地整のワークシヨップは、集落の将来を考えるきっかけをつくった点で評価できる。もちろん住民自身がアイディアを出し合うことには賛成だが、人口減少や高齢化が著しい集落ほど難しく、外からの発想や資金援助を必要としている。ただ八重の事例をもつて、成果や今後の期待を簡単に語ることは避けた。村づくりは二十年、三十年待たない。

また、八重集落の取り組みが実行され、その輪の中にワークシヨップ主催のスタッフが個人的にも加わり、「地域への思い」を村人と共有している姿を期待したい。

増被害鳥獣

「大いに不安」5割超

九州8集落 九地整調査 離村の原因にも

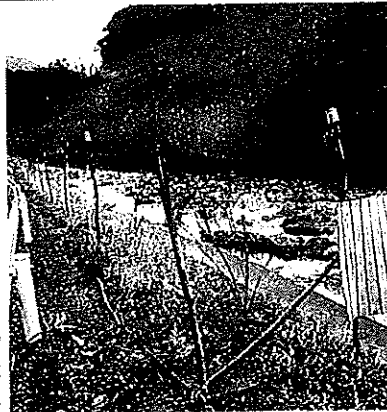
過疎化や高齢化で伝統
が危ぶまれる九州の集落
住民のうち、五割以上が

農作物の鳥獣被害増加を
「大いに不安」と考え、
それが原因で将来も住み
続けることに悩んでいる
ことが、国土交通省九州
地方整備局が実施したア
ンケートで分かった。九
州での鳥獣被害の額は年
間三十億円超の高水準で



推移しており、各市町村
は防止策づくりに追われ
ている。
アンケートは九州七県
の四百八十一集落の住民
を対象に行った。それによ
ると、鳥獣被害の増加
について、回答者の53%
が大いに不安とした。

不安(14.5%)、やや不安(21.6%)を占めた。



鳥獣被害に悩む宮崎県西
米良村には、各所に防獣
ネットが張られている

集落居住の意識別でみ
ると、今住んでいる集落
から「状況により離れさ
るをえない」と考える人
の58.6%が、鳥獣被害
を「大いに不安」と感じ
ている。「住み続けたい」
と回答した人より、不安
視する割合は約8割高
く、鳥獣被害が集落を離
れる原因の一つとなって

いることがうかがえる。
九州農政局によると、
二〇〇七年度の鳥獣によ
る農作物の被害は九州全
体で約三十億二千万円。
〇六年度(約三十七億三
千万円)より回復してい
るが、依然高水準のまま。
種類別ではイノシシの被
害が約十五億一千万円と
ほぼ半分を占める。森林
の被害は約三億七千万円
(〇六年度、九州森林管
理局調べ)で、二〇〇五年

間で最も多い。
昨年二月に施行された
鳥獣被害防止法に基づ
き、市町村は農作物被害
の防止計画を作成してい
る。全国では、全体の42
%に当たる七百四十市町
村が既に作成、あるいは
〇八年度中に作成予定。
都道府県別に市町村の策
定済み状況を比べると、
長崎が100%、大分94
%、佐賀85%と九州が上
位を占めている。